広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第57号　2008　221－224

攻撃の置き換え傾向と TDA パラダイムにおける攻撃評定の関連

淡　野　将　太

（2008年10月２日受理）

Relation Between Trait Displaced Aggression and Aggressive Responding in Triggered Displaced Aggression Paradigm

Syota Tanno

Abstract: Present study elaborated measuring capability of Japanese version of the Displaced Aggression Questionnaire (Tanno, 2008) in 3 studies. Study 1 conducted reverse-keyed items of the measure and examined correlation between normal items and reverse-keyed items. Significant negative correlation indicated that acquiescence bias of the measure was low. Study 2 added samples to data collection of Tanno (2008) and examined factor structure of the measure. Samples were university and technical college students (N = 1496, age range: 18–24). Factor analyses indentified 3 factors in the 31-item structure (α = .93): angry rumination (α = .91), revenge planning (α = .92), and general tendency to engage in displaced aggression (α = .92). The structure was the same as those of Denson, Pedersen, & Miller (2006) and Tanno (2008). Study 3 examined relation between the measure and aggressive responding in hypothetical situation of triggered displaced aggression paradigm. Result indicated positive correlation between the measure and aggressive responding. Finally, further research tasks of Japanese version of the Displaced Aggression Questionnaire were discussed.

Key words: displaced aggression, DAQ, triggered displaced aggression
キーワード：置き換えられた攻撃，DAQ，TDA

問題と目的

置き換えられた攻撃とは，個人が挑発事象を経験した時に，挑発の源泉ではない他の対象に表出する攻撃のことである（Dollard, Doob, Miller, Mowrer, & Sears, 1939; Hovland & Sears, 1940）。例えば，ファーストフード店でのアルバイト中に客からクレームを受けた大学生が，同僚のアルバイトにきつく当たる，といった攻撃行動が置き換えられた攻撃である。つまり，置き換えられた攻撃は，日常語でいうやつ当たりに相当する。また，誘発されて表出する置き換えられた攻撃のことを TDA（triggered displaced aggression）という（Dollard, 1938）。上記の例において，同僚のアルバイトのちょっとしたミスをきっかけにきつく当たった場合，これを TDA と呼ぶ。つまり，TDA は，誘発事象をきっかけに表出するやつ当たりのことである。

Pedersen, Gonzales, & Miller（2000）は，挑発事象と誘発事象の交互作用によって置き換えられた攻撃を誘発する TDA パラダイムを構築し，実験室における TDA 研究を可能にした。TDA パラダイムの実験手続きは次の通りである。まず，T1（time 1）における挑発事象において，実験者が1つ目の課題を実施する。実験者は，実験参加者に対して課題における成績を非難する。次に，T2（time 2）における誘発事象では，実験者に代わって後の攻撃対象者となる研究アシスタントが２つ目の課題を実施する。研究アシスタ

ントは，課題の説明を行う際に早口で説明し，説明の途中で発音および課題番号を間違うことで誘発を行う。その後，実験参加者には研究アシスタントを評価する機会が与えられる。その際，研究アシスタントに対する実験参加者の評価は，研究プログラムにおける研究アシスタントの雇用機会を左右すると告げられる。つまり，ネガティブな評価は，相手に危害を加えることを意図した攻撃行動として測定される。以上の実験手続きによって，TDA を測定する。

Denson, Pedersen, & Miller（2006）は，置き換えられた攻撃に従事しやすい傾向，すなわち，攻撃の置き換え傾向を測定する DAQ（displaced aggression questionnaire）を作成した。DAQ は，挑発事象によって生じた怒りについて反すうを行う傾向を測定する“怒りの反すう（angry rumination）”10項目，挑発事象について悪意を抱き，報復を企てる傾向を測定する“報復の企図（revenge planning）”11項目および挑発の源泉ではない他の対象に攻撃を加える傾向を測定する“攻撃の置き換え（displaced aggression）”10項目，合計３因子31項目で構成される。

Denson et al.（2006）は，DAQ の作成過程において，妥当性検討に位置づけた次の３点の検討を行っている。すなわち，１点目は，攻撃の置き換え傾向と理論的に関連する概念との関連の検討である。攻撃特性や怒り特性などの，攻撃の置き換え傾向と関連すると考えられる社会的行動特徴に関する尺度との相関関係から，妥当性を検討している。

２点目は，DAQ の回答における反応バイアスの検討である。DAQ は，全31項目が通常項目であり，反転項目を含まない。そのため，反応バイアスによって回答に歪みが生じる可能性が考えられる。この問題を解決するため，Denson et al.（2006）は，DAQ 全31項目について，対応する反転項目31項目を作成した。次に，反転項目をランダムに15項目と16項目選出し，それらに対応しない通常項目16項目と15項目を合わせた合計31項目の質問紙を２編構成した。そして，調査対象者のグループを２群設定し，各群における通常項目と反転項目間に有意な負の相関を示すことで反応バイアスの低さを示した。

３点目は，DAQ と TDA パラダイムにおける攻撃評定との関連の検討である。攻撃の置き換え傾向が高い個人は，挑発事象を経験した後に些細な誘発事象を経験すると，置き換えられた攻撃が誘発されやすく，TDA が強くなると仮定される。そのため，DAQ と TDA パラダイムにおける攻撃評定との関連の検討を妥当性検討のひとつに位置づけ，検討を行った。その結果，DAQ は TDA パラダイムにおける攻撃評定を予測することが示された。これら一連の検討から，DAQ は妥当性を有する尺度であることを示したのである。

日本における置き換えられた攻撃研究は，淡野（2008b）によって TDA パラダイムの仮想場面法が，また，淡野（2008a）によって DAQ 日本語版が作成されている。淡野（2008b）は，日本の心理学研究における倫理問題への配慮（ethical concerns）から，TDA パラダイムを仮想場面法に応用している。仮想場面法は，研究参加者が所属するコース（学科・専攻）の教授から仕事の手伝いを依頼され，先輩および同輩と2人1組のペアで行う仕事をする物語文において，挑発事象，誘発事象および攻撃場面が設定されている。挑発事象は，研究参加者が先輩から作業が遅いことを指摘され，作業能力に関して非難される場面，誘発事象は，研究参加者が同輩から作業のペースを上げることを提案される場面，攻撃場面は，教授から同輩の仕事量を決めるよう指示される場面と，教授から同輩のアルバイト代の参考として同輩についての印象を尋ねられる場面を設定している。仮想場面法の妥当性は，Pedersen et al.（2000）と同様に，置き換えられた攻撃に及ぼす些細な誘発事象の影響を検討することによって確認している。

淡野（2008a）は，DAQ 日本語版を作成し，原版と同様の，“怒りの反すう”10項目，“報復の企図”11項目，“攻撃の置き換え”10項目，合計３因子構造31項目を得ている。DAQ 日本語版の妥当性は，原版で行われた妥当性検討の追試の形式で行っている。すなわち，攻撃特性や怒り特性などの，攻撃の置き換え傾向と関連すると考えられる社会的行動特徴に関する指標との相関関係を検討している。

しかし，DAQ 日本語版は，原版の妥当性検討手続きにおいて行われた，DAQ の反応バイアスの検討および DAQ と TDA パラダイムにおける攻撃評定の関連を検討していない。そのため，DAQ の回答における反応バイアスおよび攻撃の置き換え傾向の予測力が懸念される。そこで，研究１では，DAQ 日本語版の反応バイアスの低さを示す。加えて，研究２では，淡野（2008a）のデータコレクションにサンプルを追加し，DAQ 日本語版の因子構造の確認を行う。そして，研究３では，攻撃の置き換え傾向と TDA パラダイムにおける攻撃評定の関連を検討する。これらの検討を通して，DAQ 日本語版の測定力の精緻化が可能となる。

研　究　1

目　的

DAQ 日本語版における通常項目の反応バイアスの低さを示す。この目的のために，まず，DAQ 日本語版全31項目について，対応する反転項目31項目を作成する。次に，反転項目をランダムに15項目と16項目選出し，それらに対応しない通常項目16項目と15項目を合わせ，合計31項目の質問紙を2種類構成する。さらに，調査対象者のグループを2群（group 1：G1, group 2：G2）設定し，2種類の質問紙のいずれかを実施する。そして，各群における通常項目と反転項目の相関関係を検討し，有意な負の相関を見出す。

方　法

調査対象者　G1には大学生80名（男性32名，女性48名），平均年齢20.24歳（SD ＝1.29），G2には大学生61名（男性13名，女性48名），平均年齢20.21歳（SD ＝1.00）をそれぞれ割り当てた。

質問紙の構成　DAQ 日本語版（淡野，2008a）全31項目について，対応する反転項目31項目を作成した。例えば，通常項目の“私を怒らせた出来事について，長い間考え続ける”は，反転項目として“私を怒らせた出来事について，長い間考え続けることはない”とした。また，通常項目の“気分が悪い時，他の人にやつ当たりする”は，反転項目として“気分が悪い時でも，他の人にやつ当たりすることはない”とした。G1には，通常項目16項目と反転項目15項目を合わせた合計31項目の質問紙を，G2には通常項目15項目と反転項目16項目を合わせた質問紙をそれぞれ実施した。

手続き　調査は，質問紙による集団調査を行った。いずれも７段階評定法（全くあてはまらない：１－とてもよくあてはまる：７）であった。

結果と考察

G1において，反転項目15項目（α＝.78）と通常項目16項目（α＝.85）との相関係数を算出した結果，r ＝－ .61（p ＜ .001）であり，有意な負の相関を示した。G2において，反転項目16項目（α＝.78）と通常項目15項目（α＝.85）との相関係数を算出した結果，r ＝－ .54（p ＜ .001）であり，有意な負の相関を示した。これらの結果は，DAQ 日本語版の反応バイアスの低さを示すものである。

研　究　2

目　的

淡野（2008a）の DAQ 日本語版のデータコレクションにサンプルを追加し，DAQ 日本語版の因子構造の確認を行う。具体的には，探索的因子分析，確認的因子分析および適合度指標の検討から，因子構造の確認を行う。

方　法

調査対象者　調査対象者は，淡野（2008a）の777名に719名を追加した大学生および専門学校生1,496名（女性872名，男性589名，不明35名），平均年齢20.02歳（SD＝1.11）であった。年齢範囲は，18歳から24歳であった。

質問紙の構成　質問紙は，DAQ 日本語版（淡野，2008a）31項目で構成した。

手続き　調査は，質問紙による集団調査を行った。評定は，７段階評定法（全くあてはまらない：1－とてもよくあてはまる：7）であった。

結果と考察

DAQ 日本語版31項目について，最尤法による因子分析を行った結果，固有値が10.4，4.4，3.2，1.0，0.9，0.8, 0.7（以下略）と推移したため，３因子を抽出した。固有値は，スクリープロット基準およびカイザーガットマン基準を満たしていた。次に最尤法プロマックス回転による因子分析を行った結果，３因子31項目（α＝.93）で採用し得る値が得られ，第１因子が“報復の企図”11項目（α＝.92），第２因子が“攻撃の置き換え”10項目（α＝.92），第３因子が“怒りの反すう”10項目（α＝.91）となった。DAQ 日本語版３因子における適合度は GFI＝.997，CFI＝.997，RMSEA＝.031であった。これらの結果から，DAQ 日本語版の因子構造が確認された。

研　究　3

目　的

DAQ と TDA パラダイムにおける攻撃評定の関連を検討する。攻撃の置き換え傾向が高い個人は，挑発事象を経験した後に些細な誘発事象を経験すると，置き換えられた攻撃が誘発されやすく，TDA が強くなると仮定される。そのため，攻撃の置き換え傾向と TDA パラダイムにおける攻撃評定は，有意な正の相関関係を示すことが予想される。

方　法

調査対象者　調査対象者は，大学生54名（男性23名，女性31名），平均年齢20.35歳（SD＝0.99）であった。

質問紙の構成　質問紙は，DAQ 日本語版（淡野，2008a）31項目と，TDA パラダイムの仮想場面法（淡野，2008b）で構成した。仮想場面法は，挑発事象，誘発事象および攻撃評定４項目（仕事量，次に仕事をする時も一緒に仕事がしたいか，人物的に好ましいか，

友好的か）を含む物語文であった。

手続き　調査は，質問紙による集団調査を行った。DAQ日本語版は７段階評定法(全くあてはまらない：１－とてもよくあてはまる：７）であり，TDAパラダイムにおける攻撃評定は11段階評定法（e.g.，仕事量：非常に少なくする：１－少なくする：４－多くする：８－非常に多くする：11）であった。

結果と考察

DAQ日本語版31項目（α＝.94）と攻撃評定4項目（α＝.74）の相関係数を算出した結果，r＝.40（p < .05）であり，有意な正の相関を示した。結果から，DAQ日本語版得点が高い個人は，TDAパラダイムの仮想場面法における攻撃評定を高く評定することが示された。すなわち，攻撃の置き換え傾向が高い個人は，些細な誘発事象によってTDAを表出しやすいことが示された。この関連は，TDAパラダイムの仮想場面法の妥当性としても採用可能である。

総合考察

本研究では，DAQ日本語版（淡野，2008a）の測定力の精緻化として，３つの研究を行った。研究１では，DAQ日本語版の反転項目を作成し，通常項目と反転項目の相関関係を検討した。その結果，通常項目と反転項目は有意な負の相関を示し，反応バイアスの低さが示された。研究２では，淡野（2008a）のデータコレクションにサンプルを追加し，1496名（女性872名，男性589名，不明35名），平均年齢20.02歳（SD＝1.11）のデータについて因子構造の確認を行った。その結果，DAQ日本語版は，Denson et al.（2006）および淡野（2008a）と同様に，“怒りの反すう”（α＝.91），“報復の企図”11項目（α＝.92），“攻撃の置き換え”10項目（α＝.92）の３因子31項目（α＝.93）であった。研究３では，DAQ日本語版とTDAパラダイムにおける攻撃評定の関連を検討した。その結果，DAQ日本語版とTDAパラダイムにおける攻撃評定は有意な正の相関を示した。

淡野（2008a）は，DAQ日本語版を用いた研究課題として，次の３点を指摘している。すなわち，DAQ日本語版の対象年齢の拡大，児童・生徒用DAQの作成およびDAQ日本語版を用いた社会的行動特徴の文化間比較である。本研究は，淡野（2008a）によって作成されたDAQ日本語版について，補完的に測定力の精緻化を行ったと言える。本研究で精緻化が行われたDAQ日本語版を用いて，今後の研究課題を推進することが必要である。

【引用文献】

Denson, T. F., Pedersen, W. C., & Miller, N. (2006). The Displaced Aggression Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**, 1032-1051.

Dollard, J. (1938). Hostility and fear in social life. *Social Forces*, **17**, 15-26.

Dollard, J., Doob, L. W., Miller, N. E., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. (1939). *Frustration and aggression*. Oxford, England: Yale University Press.

Hovland, C., & Sears, R. (1940). Minor studies of aggression: VI. Correlation of lynchings with economic indices. *Journal of Psychology*, **9**, 301-310.

Pedersen, W. C., Gonzales, C., & Miller, N. (2000). The moderating effect of triggering provocation on displaced aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 913-927.

淡野将太（2008a）．攻撃の置き換え傾向尺度（DAQ）日本語版作成に関する研究　教育心理学研究，**56**, 171-181. (Tanno, S. (2008a). Japanese version of the Displaced Aggression Questionnaire. Japanese *Journal of Educational Psychology*, **56**, 171-181.)

淡野将太（2008b）．置き換えられた攻撃の誘発（TDA）に及ぼす挑発者および攻撃対象者の地位の影響　教育心理学研究，**56**, 182-192. (Tanno, S. (2008b). Status of provocateur and target, and triggered displaced aggression. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **56**, 182-192.)

（主任指導教員　前田健一）